

平成三十一年度 入学試験問題(前期日程)

国 語

試験時間 九十分

人文社会科学部 人文社会科学科(人文科学コース)

問題冊子 問題……  ページ……一〜七

解答用紙……五枚(白紙を除く)

配点……表示のとおり

注意事項

- 一、試験開始の合図まで、この問題冊子を開かないこと。
- 二、試験中に問題冊子・解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 三、各解答用紙に受験番号を記入すること。  
なお、解答用紙には、必要事項以外は記入しないこと。
- 四、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所記入すること。  
(「白紙」のページには、記入しないこと。)
- 五、解答用紙の各ページは、切り離さないこと。
- 六、配付された解答用紙は、持ち帰らないこと。
- 七、試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。
- 八、試験終了後、指示があるまでは退室しないこと。

一  
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(一〇〇点)

哲学者ヘーゲルの言説に「共同性は最高の自由」なる一節がある。

ヘーゲルについては、非常にネガティブなとらえ方をすれば、どうしても解釈できるあやふやな論理でもって何となく説得性をもつキライがある。それがために彼は日本人に総じて好まれるようでもある。私はこの一節についてもたいした意味はないのかもしれない、と思いつつ、学生時代にはじめて目にしたときから、何とはなしに気にかかっていた。とりわけ「共同性」と「自由」という相矛盾すると思えない語句が、どうすればキョウメイしあうのかが、若い時分にはよく理解できないでいたのである。

しかし、それ以後、拙いながらも政治的、哲学的なる思考をめぐらすうちに、あるいは、それよりも人生経験を多く重ねたがために、と申したほうが妥当な気もするが、どうやらその意味が私なりにある程度は解釈できるようになった。それは、私が命名した「社会をつくる自由」とも相関するところが大いにある。

まず、「共同性」とは何か。それは平たくいえば、人びとが共同する性質であり、社会（共同体）という人間同士からなる集団をつくりあげ、あるいはそれを維持、向上させる原動力となるものだ。つまり、他者や社会に対して自らが「責任」を負おうとする道義欲とも同義である。  
このような「社会をつくること」が、どうして「最高の自由」なのか。

古来より、人間の営みのなかで、「社会をつくること」と「自由」との関係は常に相反関係にあつた。要するに、「社会をつくること」は人間の集団性を、そして「自由」とは人間個人を重んじるものだからだ。ゆえに哲学や政治学が営々として取り組んできたのは双方の折り合いをつけることであつたといつても過言ではあるまい。

① 近年だけに限ってみても、社会が個人かという問題は、さまざまな概念に焼き直されながら争われ、いよいよカネツ<sup>b</sup>している。  
たとえば、哲学でいうところの「構造主義—実存主義」の対立は、「構造」という個人を包み込む社会の個人への影響力が過大であることを認めつつも、その「構造」のなかにあつても個人の「自由」など存在しないと断じてしまうのではなく、主体性（実存）による「自由」の存在を見出し<sup>みいだ</sup>てようとする「ポスト構造主義」へと議論の舞台を移行させている。

同様に政治学では、「リベラル—コミュニタリアン」の論争で、「リベラル」という個人主義の行き過ぎによって高じた、社会の制約を受けない「自由」を排し、集団的価値を重んじる「コミュニタリアン」が勢力を増してきた。両者のどちらを採るべきかという課題に対して、その一方をまったく無視することがありえないことではいまや議論は収斂<sup>しゅうれん</sup>に向かいつつあるように思える。

以上の哲学や政治学の領域で争われてきた「社会をつくること」と「自由」との葛藤は、現代に至っても、いまだ完全な決着をみていない。そして、いま一つ考えねばならぬことは、「社会をつくること」と「自由」とが対立するものと捉えない考えの必要に迫られていることであり、それは「社会をつくること」と共存できる「自由」の概念を新たにソウシュツすることに違いあるまい。

それは、生活欲と反対に減退の一途を辿る道義欲と結びつく可能性のある「自由」への要請であり、その答えが「社会をつくる自由」である、と私は考えるのである。

このような「新しき自由」の概念のハックツは、いままで誰もが考えもしなかったことかといえ、そうでもない。そもそも「自由」とは何かについて述べておこう。

もとより、自分の気の向くまま、ただ放埒の限りを尽くすのが「自由」なのではあるまい。

そして、自分ですべてのことを決定し、行為するということ「自由」もまた夢想に過ぎない。そのような「自由」は万能の力を備える必然性をもつが、それは人間でなく「神」でなくばなしえるものではない。あらゆる能力をもつわけなどない人間が自らのみで考え、あるいは行ったと思っていることが、現実には他者や社会の影響を受けていないはずが無いからである。人間が他者との関係をまったく絶ち、社会（共同体）から何ら制約を受けぬ孤立した存在であることなど、無人島にたった独りで生活するぐらいの場合でしかありえない。

しかし、歴史学者E・H・カーが見抜いたように、無人島生活のロビンソン・クルーソーも、既存社会との接点を捨てておらず、別天地で新たな社会を構築しようと試みていることからすると、独りで生きる個人などはしよせん幻想に過ぎない。よって、近ごろは「自由至上主義者」を自称し、社会を不要視する者が増殖しているように見受けるが、このような者は自らが社会に寄生している存在たることをわきまえぬ痴れ者といえよう。

つまり、人間は社会に帰属しなければ、生活を営むことはできない動物なのであって、このため、古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、人間は「社会的動物」だとしたのである。

これを推し進めていくと、哲学者のスピノザが言い放ったように、およそ人間というものに、自己決定する「自由」などあるはずがない、との結論にさえ辿り着くのだ。さすれば、果たして「自由」とはいったい何なのだろうか。

古来、多くの哲学者や政治学者がこの難問に挑んできた。

まず、「自由」は相当に多義的な要素を孕んでいることから、それを限定的に解釈していく方法がとられた。たとえば、哲学者のアイザイア・バーリンは「自由」にはリョウウギセイがあるとしながら、その一方の「消極的自由」に肩入れをした。

この「消極的自由」とは、社会（共同体）からの「干渉の不在」によって得られるものである。たとえば、奴隷制の廃止による奴隷解放や、為政者

による宗教的弾圧を解除することによる信教の自由などが、それにあたるだろう。つまり、近代の革命に代表されるように、富貴や権門による抑圧から人びとが解放されることの印象が強いためか、「自由」というものをさまざまな外在的制約から解放することとらえるのが「消極的自由」である。

一方、この「消極的自由」と対極にあるものとして「積極的自由」があるとされる。

これは、外在的制約によらず、何ごとも自己の内面的な決定によるという、自己決定による「自由」のことをいう。このため、他者や社会との関係をもたず、外在的制約によらぬ「自由」などありえないとするスピノザや、その流れを汲む、人間の行動には何らかの外在的因果があるとする構造主義者からは、ほとんど無視されてきた。

たしかに、一見、「積極的自由」を体現するかに思える、社会（共同体）に存在する規範や慣習を積極的に<sup>しりぞ</sup>ける態度や、異風な外見や言動を際立たせる行為も存在する。しかし、このような態度は、しよせんは他者や社会を意識し、ことさらにそれとの差異を強調しようとする自負心に過ぎまい。そもそも、このような浅薄な「非—消極的自由」は、社会の圧力に簡単に屈してしまふ性質のものであり、だからこそ道徳的言説を背景とした「コミュニティ」に対して、「自由」なるものは相対的に脆弱<sup>ぜいじやく</sup>なのであつて、このような「コミュニティ」が勢威を振るうのを許してしまうともいえる。よつて、「積極的自由」の真髓は、もつと奥深いところに隠されているはずだ。

たとえば、ヘーゲルは「積極的自由」についてまったく異なる捉え方をした。彼は「精神の自由」とは他者から無媒介に独立するものではなく、他者の内で他者を媒介して獲得された独立である、と述べた。つまり、他者が自己とは異なること、あるいは自己が他者と異なる存在だということに気づくときに、はじめて「自由」が見出せるというのだ。

社会を「コミュニティ」が席捲<sup>せつけん</sup>するのは、「自由」が相対的に低下しているというよりは、これに対抗できる「積極的自由」が発揮されていないからである。それは「他者と異なる考えを抱く自由」であるといつてもよい。自分の意思を強く出すことで、協調性を排して社会を毀損するかのような印象を受けるかもしれないが逆であろう。この「自由」は、ことさらに自己が他者と異なることを強調するのではない。それは、かのデカルトが懷疑したように、「コギト（われ思う）」も社会の影響を受けており、すでに構造的に思わされていると考える態度であり、その考える自己の存在を認識することで「自由」になれる、ということだ。

これは社会と対立するものでなく、むしろ表裏一体のものだ。つまりは他者と関係し、共同していく際に、社会という「コミュニティ」に流されぬ「自由」をもつことである。一方で、それは自らの信条を勝手に抱くのではなく、社会にある種の「責任」をもつ「自由」である。そして、このような「自由」が発揮される社会をつくることも、このような「自由」によるのであつて、双方は互いに相関するのだ。

（竹井隆人『社会をつくる自由—反コミュニティのデモクラシー』による。ただし、一部省略した箇所がある）

(注) ヘーゲル——一七七〇年～一八三一年。ドイツ観念論哲学の代表者。

構造主義——人間的・社会的な諸現象を有機的に結びつけている全体的構造を想定し、個々の現象をその構造全体の中で捉えようとする立場。  
実存主義——人間を主体的・自覚的な存在として捉え、その視点から現実の人間の実存を明らかにしようとする思想的立場。

コミュニタリアン——人間存在としての共同体の復権を唱える一群の政治哲学者の総称。

E・H・カー——一八九二年～一九八二年。イギリスの歴史家・国際政治学者。

ロビンソン・クルーソー——一七一九年刊行の、イギリスの作家デフォーの小説。船員ロビンソン・クルーソーが難船して無人島に漂着し、  
自給自足の生活を送るさまが描かれている。

アリストテレス——前三八四年～前三三二年。古代ギリシャの哲学者。

スピノザ——一六三二年～一六七七年。オランダの哲学者。

アイザイア・バーリン——一九〇九年～一九九七年。イギリスの政治思想家・政治哲学者。

コギト——「われ思う」という意味のラテン語。「コギト・エルゴ・スム」(われ思う故にわれあり)は、デカルトが著『方法序説』(一六三七年)の中で、彼の哲学の第一原理とした命題である。

問一 傍線部 a～g について、カタカナは適切な漢字に改め、漢字は読みを記せ。

問二 傍線部①「社会か個人かという問題は、さまざまな概念に焼き直されながら争われ」とあるが、その実例を二つ、本文中からそれぞれ二十字以内で抜き出して答えよ。

問三 傍線部②「消極的自由」について、次の(ア)と(イ)の問いに答えよ。

(ア)「消極的自由」とはどのような自由のことであるか、説明せよ。

(イ)それが「消極的」と呼ばれているのはなぜか、「消極的」という語句の意味を踏まえて説明せよ。

問四 傍線部③「『積極的自由』の真髄」とはどのような自由のことであるか、説明せよ。

問五 波線部「このような『社会をつくること』が、どうして『最高の自由』なのか」について、次の(ア)と(イ)の問いに答えよ。

(ア)「このような」の指示する意味内容を、直前の文章を踏まえて簡潔に答えよ。

(イ) 筆者は「このような『社会をつくること』」を、最も理想的な自由であると考えている。筆者がそのように考える理由を、本文中で取り上げられている他の自由と比較しながら、説明せよ。